現代生き抜くリーダー論

わたしの本棚

佐藤一斎「言志四録」

「座右の辞書」として常に傍らに置く書物が、900ページを超すこの大作だ。一斎が説く千を超す処世訓の語録に学ぶところが多いという。

「西郷隆盛ら明治の志士の多くが読んだ本です。一斎は、長い人生では不都合なことが起きても不幸ではないと説く。西郷は不遇の時にこれを読み、自らの試練を乗り越えたんです」

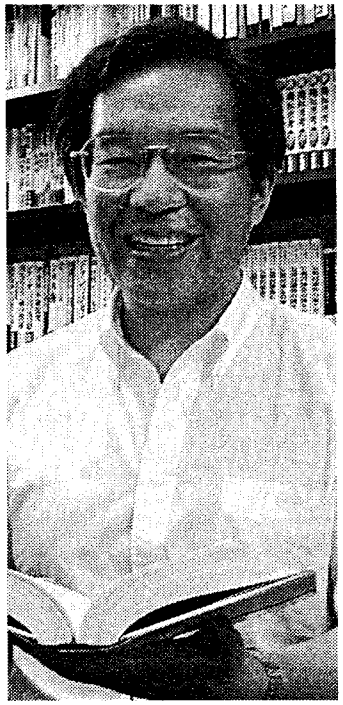
小田さんは「人間学」と称し、人の生き方を追い求めてきた。明治の志士の歩みを研究する中で、15年ほど前にこの本と出会った。西郷と同じく難題にぶつかるたびに読み返した。

一斎は江戸時代の儒学者だ。40年余りかけて大作をつづった。門下には佐久間象山、渡辺崋山らがいる。

現代語訳の一節にこうある。「心静かにして天地万物の創造化育の跡をながめてみると、すべて少しも無理のない自然なやり方でなされている」。小田さんは「一斎が説くこの自然体は、松下幸之助氏の生き方そのものだ」と、「経営の神様」につながる訓話のすばらしさを読み解く。

幸之助氏は松下政経塾を開き、後身を育てた。小田さんはその門下生だ。一斎の語録を「現代にも通用するリーダー論」とみる。

北海道フロンティア・カレッジ塾頭　小田　全宏さん（45）



おだ・ぜんこう　58年滋賀県生まれ。東大法学部卒。民間シンクタンク「日本政策フロンティア」理事長。多数の企業で人材教育を実践し、選挙の公開討論会を各地で展開。道経済再生に民間が立ち上げた「フロンティアカレッジ」塾頭としての手腕が期待される。

「無私の魂」成功の秘訣

「幸之助氏は生涯悩みを抱え、『もっと素直な心にならないといかん』と口にしていた。若いころも『世界の松下を作るぞ』と意気込んで頑張ったのではない。食うのが精いっぱいだったが、それゆえ部下の提言にも耳を傾けた。『おれは、こうするんだ』と力んでばかりいると、周囲はしらけてついてこない」

「私心を去れ」は一斎の処世訓。小田さんは若き経営者らに「無私の魂」こそが大切と話し「自分がどう得をするかをぬぐい去ること」が成功の秘訣と強調する。「京セラの稲森和夫氏も『動機が善か。私心がないか。世のためになるか』を常に問うていた」とも。

北海道経済の再生を目指し、札幌の村松弘康弁護士らが今年春に立ち上げた「北海道活性化センター」。その活動のひとつが再生に燃える経営者らを集めたリーダー養成講座「北海道フロンティア・カレッジ」。日本を代表する経営者の生き様を知る小田さんに「塾頭」として白羽の矢が立った。週末ごとに来道し、再生を目指す経営者らを鼓舞し続ける。

「リーダーとは志ある存在。優れたリーダーが生まれれば物事は動く」

（報道部・綱島洋一）

北海道文化　私の視点

大志の精神、大地に根ざせ

北海道に根付く文化は「フロンティア・スピリット」です。クラーク博士の「少年よ大志を抱け」の言葉を待つまでもなく、北海道の大地に根ざした魂の叫びだと思う。北海道に元気がないとすれば、この精神が失われてきているからではないか。

ならば、またその精神を復活させたらよい。北海道には大自然があり、食べ物もおいしいが、与えられたこの環境に頼って再生はない。心の持ちようだ。「フロンティア・スピリット」を生かし、自分たちがどうしたいかを問い続けることで、可能性が生まれる。